実践交流
小学国語
―全学年―

自分の考えを表現できる子どもたち
〈書くことを中心に〉

神奈川県小田原市立大窪小学校　二宮　龍也

一　書き続ける大切さ

人間にとって表現することは重要な意味をもっている。しかし、表現の不得意な子が何と多いことか。

少しでも書くことを好きになってほしいと、授業では書くことを多く取り入れている。書くことは、思考力の発達と共に、確かな自分を作ることにつながる。

では、書くことにとって大切なことは何なのだろう。それは、「書き続けること」と「書く技術を身につけること」である。

書き続けるという目標で取り組む最も良い方法は、日記指導とノート指導である。

日記指導で大切にしていることは、子どもたちが継続できるという点である。継続させるためには、指導しないということを基本に考えている。私たちは、子どもが書いた文章を見ると、すぐに直したがる。直すことによって、子どもたちは、きっと良い文章を書くだろうと思っている。

しかし、何回直しても同じ誤りを続け、そのうち書かなくなってしまう。

これでは、指導にならない。大切なことは継続である。そのためには、一行しか書いてこないと思わず、一行も書けたと発想を変えることである。そして、その一行の中の言葉をほめてあげることである。そのことにより、また書こうという意欲につながる。

書き続けることは、書き慣れることにつながる。この書き慣れるは、表現の基本と考えて良い。この書き慣れるがなければ、表現の方法を教えても、結局は書けないになってしまう。

書き続ければ、書き慣れ、書く題材も自分自身で見つけることができるようになるのである。

毎日一行しか書いて来なかった子が、自分にとって特別の出来事があった日、日記用紙に二枚も書いてきた。これは、書き慣れる大切さを物語っていないだろうか。

日記には、書き慣れるだけではなく、日々の集中力と会話にもその良さが出てくる。次のような報告を耳にしたことがある。

Aというクラスは、日々日記をつけるようにした。Bは、週に一度日記の宿題を出した。その結果、Bに比べAのクラスは事故がほとんどなくなった。つまり、今日は何を書いたらいいのか考えるようになり、集中力が身についたということを表している。

子どもたちの言葉の中にも、「そうだ、今日はこれを日記に書こう。」という会話が多く聞かれるようになった。

では、書き続けるようになるための方法は、あるのだろうか。

先程も述べたが、指導しないことが一番である。良い言葉、良い文を見つけ紹介してあげることが大切である。時間がないときなどは、○だけでも十分である。しかし、子どもたちは時に聞きに来る。「先生、今日の私の日記どうだった。」と。その折、すぐに答え

られないと子どもたちは落胆し、先生は○だけつけて読んでくれていないと思ってしまう。

そこで、日記は、子どもたちが見ているところで読むのが大切となる。授業中は無理であり、休み時間は教室から子どもがいなくなる。どの時間帯がいいかというと、最も良い時間は、給食の前後である。五分～十分で全員の日記を読む。この時間なら全員教室にいる。教師は、この短時間で読む訓練をすることが大切である。

そして、帰りの会を利用して、その日の日記で、内容が良かった子、技術がしっかりしている子の日記、二～三人を読んで紹介してあげるのである。

その日の日記は、その日のうちに子どもに返すのが鉄則である。

二　ノート指導

ノートで重要なことは、メモを取ることと自分の考えを書かせることである。

自分の考えを書くにも二種類ある。一つは、自分の考えを持たせること。もう一つは、最終的に自分の考えはどうなったのかを確かめることである。

メモとは、他の子どもたちが話した内容も箇条書きにして、ノートに記すことである。

板書されたことを写すのではなく、自分で考える場としてノートは必要なのである。板書は、子どもたちに考える場を与えるようになされなければならない。

次のノートは、「大造じいさんとガン」の学習で、子どもが考えた最後の文章である。

「大造じいさんとガン」を読んで
自分の中で変わったこと

この物語は、残雪という鳥を通して、人間の生き方を教えてくれている物語だと思う。

今まで私は、人間の側からだけしか、かりをすることを見てこなかったが、相手の立場をから見ることの大切さに気づかされた。また、鳥が人間に本当の生き方を教えてくれることもあるのだと思った。

以前学習した「金子みすゞ」の見方というものを、もう一度思い出させてくれた。

（R・T）

物語を学習したあと、自分の中での変化を書くことによって、より確かな自分を作り出すことができる。

三　表現の技術を学ぶ

例えば〈物語を作る〉という単元で書くことを考えよう。

物語構造としては、登場人物を誰にするのか、中心人物と対人物の関係をどうするのか、人称は一人称か三人称か、事件（山場）をどのように設定したら良いか、この物語を通して、誰に何を伝えたいのか、自然描写や行動描写はどう描いたら良いのか。等々が考えられる。発達段階等によっても異なるが、いわゆる構成を考えることが大切になってくる。

このような技術を教えないと、荒唐無稽な作品となってしまう。日記と違って、ここでは、確実に指導しなければならない。

〈説明文を書こう〉では、教科書の構成はまねることができても、題材は自分で考えなければならない。

子どもたちが毎日使っている自転車や料理の作り方などを身近なことについて書かせることが大切になってくる。

構成としては、帰納法や演繹法についてその使い方などを指導する。

四　おわりに

表現の技術を指導することと、日記を書かせること、つまり、技術を会得することと書き慣れることは、考え方をはっきり分け、どうしたら表現力のつく子になるのかについて系統的に指導する必要がある。

にのみや　たつや　全国国語授業研究会常任理事。授業ベーシック研究会常任理事。国語の授業編集委員。詩人。